

# 接触場面における日本語母語話者の調整 行動

ーフォリナー・トークの再検討ー

今 千春\*

---

## 目 次

---

- はじめに
  - 先行研究
  - 調査
    - 調査対象者
    - 調査方法
    - 分析の枠組み
  - 会話不理解に関する調整の概要
  - 事前調整
  - 事後調整
    - NNSの何らかの行動が引き金となった場合
    - NSが自発的にNNSの不理解を留意して調整した場合
  - まとめ
- 
- 

## 1. はじめに

日本語母語話者（NS）と日本語非母語話者（NNS）との接触場面においてNNSが抱える問題の1つに「相手の話が聞き取れない、理解できない」という理解上の問題が挙げられる。この問題に直面したときNNSは、NSに助けを求めたり、自分で

---

\* 金剛大学校 専任講師 日本語教育学

推測しながら解決を図ろうとするだろう。一方、NS側も、あらかじめNNSが理解しやすいようなことばに言い換えたり、助けを求められた場合にはそれに答えたりするなど、様々な調整を行っていると考えられる。

このうちNS側が行う調整は「フォリナー・トーク」として注目され、これまで多くの研究がなされてきた。フォリナー・トーク研究は、「ゆっくり話す」「簡単なことばを使う」など、その特徴を明らかにすることに主眼がおかれ、言語面及び談話面から様々な考察が行われている。しかし従来の研究は、言語または会話の「修正」という観点から分析が行われる場合が多く、NSがNNSとの会話をスムーズに進めるために計画し、行っているという観点から分析しているものは少ないようである。さらに、フォリナー・トークがNSが発話をする前に計画、調整されるものなのか、発話後に修正されるものなのか、という点においてもあまり研究はなされていない。

そこで本研究では、NSの調整についてより広い観点から捉え、NSがNNSの不理解問題に対してどのような調整を行い会話を進行・維持しているのかについて実際の会話データをもとに考察を行う。

## 2. 先行研究

NNSが聞き手となっている場合の理解面の問題に関する研究の中で、まずNNSに焦点をあてたものとしては田中他(1986)、Ozaki(1985)、尾崎(1992)が挙げられる。田中他(1986)ではNNSの聴解モデル、さらにそこで問題が生じたときに用いる聴解ストラテジーを提示している。なおここでのストラテジーには聞き返して説明を要求するものの他に、あいづちや話題変更によって問題解決を回避するストラテジーも含まれている。

一方、NSがNNSの会話不理解に対して用いるストラテジーは「フォリナー・トーク」研究に代表される。(Ferguson 1971、スクーターデス1981)。フォリナー・トークは、Ferguson(1971)において初めて提唱された概念で、その言語の十分な能力を持たない、またはその言語の知識が全くない外の話者に対して使用される簡略化された言語使用域(simplified register)と定義されている。フォリナー・トーク研究は、主に言語的な調整に関する研究と談話面における調整の研究とに大きく分けられ、近年ではこれら両方の観点からの研究も行われている。

日本語のフォリナー・トークに関する最初の研究はスクーターデス(1981)によって行われ、日本語にもフォリナー・トークが存在すること、日本語のフォリナー・トークは

他の言語と共通した特徴を持つと同時に日本語独自の特徴も持ち合わせていることが報告された。そしてこれ以後、日本でもフォリナー・トーク研究が盛んに行われるようになった（御館1998、大平1999など）。

また近年では、フォリナー・トークをことばの簡略化に限定せず、「母語話者が言語能力が十分でない第二言語学習者とコミュニケーションを行う際に行う発話の修正」（瀬藤1995）とより広義な概念として捉える傾向にある。またEllis（1985）、Larsen-Freeman and Long（1991）では、NSが行う調整を言語調整・会話調整との2つの観点から調整の特徴を明らかにしている。言語調整には発音、語彙、文法などの調整、会話調整には話の内容、また相互交渉面での調整が含まれる。この中で特に理解面に関する調整としては「自分の発話の一部分または全部を繰り返す」「学習者が母語話者の言うことを理解しているかどうか確認する」（Ellis1985）が挙げられている。

さらにNSとNNSとの双方によってなされるという観点では、意味交渉研究（negotiation of meaning）（Gass and Varonis 1985）が挙げられる。Miyazaki（1997）はこの意味交渉研究を発展させ、会話中で生じた不適切な問題を処理するための調整モデルを提示している。この調整モデルでは、相手の調整を引き出す役割を果たす引き金（trigger）を調整マーカ―とし、誰が調整マーカ―を表出し、誰が調整を行うかに着目してその調整パターンや調整デザインについての考察がなされている。

またネウストプニー（1995）は、発話が始まる前に問題を予測し、それを防ぐためにとる措置を事前訂正（pre-correction）、発話が始まった後に問題が生じた際、話し手が自分の不適切さに気づいて行う訂正を事後訂正（post-correction）と定義している。そして、この事前訂正、事後訂正を考慮に入れたより広い視点からNSの用いることばの特徴を研究する必要があると説いている。

しかし、従来のフォリナー・トーク研究では主に事後調整を扱ったものが多く、事前・事後という視点から考察を行ったものはまだ少ないようである。さらに調整そのものに対してもあくまで「修正」という意味合いが強く、会話を進行する、維持するという視点からの考察はあまり行われていない。

そこで本研究では、NSがNNSの会話不理解に対して行う調整行動全てを分析対象とし、発話の前後という視点からNSがどのようにして不理解問題に対処しながら会話を維持し、進行しているのかについて明らかにしていく。

### 3. 調査

#### 3.1 調査対象者

調査対象者はNNS21名、NS7名（NS1-NS7）の合計28名である。NSは全て大学もしくは大学院に在学中の学生、NNSは大学の短期留学生、研究留学生、大学院生、および主婦で、所属している日本語クラスによりそれぞれ初級7名（FB1-FB7）、中級7名（FI1-FI7）、上級7名（FA1-FA7）に大別した。これは、NNSに対するNSの調整をより広く把握するという目的と、NNSの日本語能力によってNSの調整に何か特徴が現れるのではないかという仮説のもとに行ったのであるが、後者のNNSの日本語能力によるNSの調整については本研究では明白な特徴は見られなかった。また、NNSの母語、エスニシティ、日本滞在歴、日本語学習歴などの属性がNSの調整に影響を与えた可能性もあるが、本研究では分析対象としては扱わなかった。

調査対象者の詳細は以下の通りである。

表1：NSの属性

	性別	学年	年齢
NS1	女性	修士2年	23
NS2	女性	修士2年	23
NS3	男性	学部4年	23
NS4	女性	学部1年	19
NS5	女性	学部1年	18
NS6	男性	学部1年	19
NS7	男性	学部1年	18

表2：NNS・初級（FB）の属性

	性別	身分	年齢	出身	滞日歴	学習歴
FB1	女性	短期留学生	22	アメリカ	1ヶ月	1年1ヶ月
FB2	女性	短期留学生	22	インドネシア	6ヶ月	9ヶ月
FB3	男性	短期留学生	20	カナダ	6ヶ月	9ヶ月
FB4	女性	主婦	28	セネガル	6ヶ月	6ヶ月
FB5	女性	予備教育生	27	フィリピン	3ヶ月	3ヶ月
FB6	男性	予備教育生	26	ブラジル	4ヶ月	4ヶ月
FB7	男性	予備教育生	29	インドネシア	3ヶ月	3ヶ月

表3：NNS・中級（F）の属性

	性別	身分	年齢	出身	滞日歴	学習歴
FI1	男性	短期留学生	25	ドイツ	6ヶ月	4年7ヶ月
FI2	男性	研究生	29	中国（ウイグル自治区）	7ヶ月	7ヶ月
FI3	女性	主婦	35	中国	1年7ヶ月	3年7ヶ月
FI4	男性	短期留学生	24	韓国	2ヶ月	3年2ヶ月
FI5	男性	短期留学生	22	オーストラリア	8ヶ月	2年7ヶ月
FI6	女性	短期留学生	23	ハンガリー	8ヶ月	2年7ヶ月
FI7	女性	短期留学生	23	ドイツ	8ヶ月	3年8ヶ月

表4：NNS・上級（FA）の属性

	性別	身分	年齢	出身	滞日歴	学習歴
FA1	女性	短期留学生	22	インドネシア	6ヶ月	3年
FA2	女性	短期留学生	22	ハンガリー	6ヶ月	2年5ヶ月
FA3	男性	短期留学生	22	インドネシア	6ヶ月	3年5ヶ月
FA4	女性	短期留学生	21	インドネシア	8ヶ月	4年8ヶ月
FA5	女性	短期留学生	21	中国	8ヶ月	3年10ヶ月
FA6	男性	短期留学生	28	中国（ウイグル自治区）	6ヶ月	2年6ヶ月
FA7	男性	短期留学生	29	中国（ウイグル自治区）	8ヶ月	2年6ヶ月

### 3.2 調査方法

本研究では、NSとNNSとの対面による会話を録音・録画し、分析資料とした。本調査のために準備された部屋でNSとNNSに1対1で約15分間自由に会話してもらい、その様子を録音・録画した。調査の際、飲食、辞書の使用、メモをとることなどの制限は特に行わなかった。なお、NSとNNSは調査当時、全て初対面であった。

調査で録音・録画された会話データは全て文字化し、分析資料とした。

さらに、NSによる発話前の調整を把握するため、会話の録音・録画に加え会話参加者の内省的意識を収集する調査を実施した。これまで内省的方法論としては発話思考法（think-aloud）、再生刺激法（stimulus recall method）、回想法（recollective studies）などが採用されてきたが、本研究では会話とその記録時点での意識を正確に記録するための最良の方法として、フォローアップ・インタビュー（FUI）（ネウストプニー1994、ファン2002）を実施した。FUIは会話録画日から1週間以内にNS、NNS両者を対象に行われ、NSに対してはNNSとの会話中、自分の発話に関してどのようなコントロールを行っていたか、NNSに対しては、NSの発話で理解が困難であった箇所、またそれに対してどのような対処を行ったかなどについて質問を行い、これらも全て分析資料とした。

### 3.3 分析の枠組み

本研究ではまず会話データとFUIでの報告をもとにNSが実施した調整行動を抽出した。データの妥当性を高めるため、分析対象とする調整行動はNSにより意識的に行われたと確認できたもののみを扱った。そして収集された分析データをNSの発話前に行われた調整か発話後に行われた調整かという点に着目し、前者は事前調整、後者は事後調整として類別した。

事後調整はさらに、宮崎（1999）の調整モデルをもとに、NNSの何らかの行動が引き金となって調整が行われた場合、またNSがNNSの不理解をNSが自発的に留意して調整を行った場合の2つのタイプに分けられた。

そしてこれらの調整ストラテジーをスクーターデス（1981）、Ellis（1985）、志村（1989）、Larsen-Freeman and Long（1991）、ファン（1998）などを参考に分類し、それぞれについて詳しい考察を行った。

## 4. 会話不理解に関する調整の概要

NSがNNSの会話不理解に対して意識的に行った調整は、合計で319件確認された。これらの調整の詳細を以下の表に示す。

表5：NSによる調整の概要

事前調整	事後調整		合計
	NNSの何らかの行動が 引き金となった場合	NSが自発的に調整を 行った場合	
117件	180件	22件	319件
	202件		

この表を見ると、NSが行った調整のうち事前調整は117件、事後調整は202件となっており、事後調整の割合の方が高くなっていることがわかる。

さらに事後調整のうち、NNSの何らかの行動が引き金となって調整が行われた事例は180件、NSが自発的に調整を行った事例は22件確認されている。このことからNSは、自己の発話に対するNNSの反応をもとに調整を行う傾向が高いということが窺える。

## 5. 事前調整

前述した通り、本研究における事前調整の事例は117件確認されている。これは全てのNSによって実行されており、全て「これはNNSには難しいだろう」「これはNNSにはわからないかもしれない」とあらかじめNNSの不理解問題の発生を予測することによって調整を計画し、実施したものであった。

以下の表は、NSが行った事前調整について、調整ストラテジーとその頻度を示したものである。

表6：事前調整における調整ストラテジー

	調整ストラテジー	件数 (%)
(1)	ゆっくり話す	16 (13.7%)
(2)	あらかじめ言い換える	73 (62.4%)
(3)	あらかじめ説明を加える	2 (1.7%)
(4)	キーワードを強調する	3 (2.6%)
(5)	固有名詞であることを強調する	2 (1.7%)
(6)	新しい話題になったことを強調する	3 (2.6%)
(7)	発話の機能をはっきりさせる	1 (0.9%)
(8)	理解を確認する	17 (14.5%)
	合計	117 (100.0%)

この表から、事前調整において最も多く使用されていたストラテジーは(2) あらかじめ言い換えるであることがわかる。「言い換え」のストラテジーは、はじめに発話しようと計画された語彙や表現がNNSには難しすぎると考えて計画直し、はじめに計画した発話とは異なる発話をするストラテジーである。

例1：事前調整「あらかじめ言い換える」ストラテジー (NS5×FB5) 2)

NS5：あー山形大↑ マイフレンド、行って、いるよ うん、勉強してる

FB5： はい あーん

上の例は、FB5が、FB5の姉が山形大へ通っていたということを話している部分であるが、ここでNS5が自分の友人も通っているということを話す際、「友人」とするところをあらかじめ英語「マイフレンド」に言い換えて発話していることがわかる。このような調

2) 会話例における文字化の凡例は巻末を参照。なお、ここで話されている人物名は全て仮名である。

整ストラテジーは先行研究においても多く指摘されていることから (Ellis 1985、Larsen-Freeman and Long 1991、和泉元1997、ファン1998、大平1999など)、このタイプのストラテジーは、NSにとって最も選択されやすいストラテジーであると考えることができる。

一方、事前調整においてのみ確認されたストラテジーは、(1) ゆっくり話す、(4) キーワードを強調する、(5) 固有名詞であることを強調する、(6) 新しい話題になったことを強調するの4種類であった。

(1) ゆっくり話すストラテジーは、NNSに聞き取りやすくするために語や節、文の間にポーズを入れ、ゆっくりと話す音声レベルの調整を言う。これはスクーターデス (1981)、Ellis (1985)、志村 (1989)、Larsen-Freeman and Long (1991)、ファン (1998) など多くのフォリナー・トーク研究においても指摘されており、これもまた普遍的なフォリナー・トークの特徴の1つであると言えよう。以下の例は、NS5とFB5との会話の自己紹介場面である。

例2：事前調整「ゆっくり話す」ストラテジー (NS5×FB5)

NS5：私は一、名前↑、ごとう、みちこ

FB5：ごとう

ここでNS5は自分の名前をFB5に知らせているのであるが、FUIにおいてNS5は「(FB5が) 日本語あんまりわからないみたいだから、1つ1つ区切ってゆっくり話した方が通じるかなと思った」と話しており、NS5がFB5の日本語能力を考慮し、音声面において事前調整を行っていたことがわかる。

次に(4) キーワードを強調するストラテジーは、キーワードとなる語を強調することによって理解を促進しようとするストラテジーで、スクーターデス (1981)、志村 (1989)、ファン (1998) などでも指摘されている。

例3：事前調整「キーワードを強調する」ストラテジー (NS1×FB1)

NS1：(笑) んと、大学院の 2年生です (笑)

FB1：今一何年生ですか ああ あーそうですか

上の例でNS1は「FB1が「大学院」を理解できないかもしれない」と予測したという。そこで「「院」を強調すればわかるかも」と考え、「大学院」の「院」にプロミネンスをおいて発話している。



また (5) 固有名詞であることを強調する戦略は、地名や人名などを「地名である」「人の名前である」ということを強調することによって、会話の理解を促進する戦略を言う。

例4：事前調整「固有名詞であることを強調する戦略」 (NS2×FB2)

NS2：千葉駅から、電車に乗って15分ぐらいいったところに 誉田っていう駅、

FB2： うーん

NS2：誉田っていう駅があつてー

FB2：

この例では、NS2が「誉田」という地名を説明している部分であるが、FUIによるとNS2は「「誉田」が地名だってわかってもらいたかった」と話している。そのため、「誉田」にプロミネンスを置き、「って駅」「っていう駅」という表現を加えることによって「誉田」が地名であることを強調していたと考えられる。

さらに (6) 新しい話題になったことを強調する戦略は、話題転換を行った際に新しい話題になったことをプロミネンスや繰り返しなどにより強調する戦略である。志村 (1989) においても「新しい話題になったことをはっきりさせる」という同様の戦略が確認されている。以下の例は、NS1がFA1との会話において使用した「新しい話題になったことを強調する」戦略である。

例5：事前調整「新しい話題になったことを強調する」戦略 (NS1×FA1)

NS1： あー えでもおいしいです タイ、は、

FA1：インドネシア人は、あの、辛いーもの好き うん (笑)

NS1：行ったことあるんです 去年卒業旅行 で行ってー

FA1： あー うん

上の例の会話は、「インドネシアの食べ物」という話題から「NSのタイ旅行」という話題に転換する部分であるが、ここでNS1が新しい話題を出す際、始めの「タイ、は」の部分にプロミネンスをおき、ゆっくりと発話していた。FUIによると「新しい話題転換のところだったのではっきり言わないと、と思った」という。このことからNS1が話題変更の開始部分にプロミネンスなどをおくことによって強調し、NNSの理解を促していたことが推察される。

以上が事前調整においてのみ確認された戦略であるが、これらの特徴を考察してみると、全ての戦略に共通して、音声的要素が含まれていることがわかる。(1) ゆっくり話す戦略は前述の通り音声レベルの調整であり、また他の3つの戦略においてもプロミネンスが伴われており、音声的要素が含まれることが多いと言えよう。このことから、音声レベルでの調整は、実際に発話が行われる前に意識的に行われる傾向があるということが示唆される。

## 6. 事後調整

本研究において事後調整は202件確認されている。さらに先述の通り事後調整は、NNSの何らかの行動が引き金となった場合とNSが自発的に自己の発話の不適切さに気づき調整を行った場合とに類別された。これらは双方ともに全てのNSによって実施されていた。以下からはそれぞれの場合の調整について詳しい考察を加える。

### 6.1 NNSの何らかの行動が引き金となった場合

自分の発話に対するNNSの反応がもととなり行われた調整は180件確認されている。これらを戦略別に考察したところ、以下の13種類に分類された。

表5：事後調整・NNSの何らかの行動が引き金となって行われた調整戦略

	調整戦略	合計
(1)	言い換える	113 (62.8%)
(2)	反復する	28 (15.6%)
(3)	反復・拡張する	14 (7.8%)
(4)	拡張する	4 (2.2%)
(5)	辞書を引く	2 (1.1%)
(6)	説明を加える	6 (3.3%)
(7)	発話の機能をはっきりさせる	2 (1.1%)
(8)	直接訂正する	1 (0.6%)
(9)	理解を確認する	2 (1.1%)
(10)	理解確認に対して応答する	4 (2.2%)
(11)	NNSの理解を待つ	1 (0.6%)
(12)	話題を変える	2 (1.1%)

(13)	不理解を許容する (調整の放棄)	1 (0.6%)
	合計	180 (100.0%)

上の表を見ると、事前調整においては8種類の調整ストラテジーが確認されたのに対し、ここでは13種類の調整ストラテジーが確認されていることから、事前調整の場合よりも多様なストラテジーが使用されていることがわかる。

またここで最も多く使用されていたストラテジーは (1) 言い換えるストラテジーで、これは事前調整と同じタイプのものであった。

さらに事後調整でのみ用いられていたストラテジーは、(2) 反復する (3) 反復・拡張する (4) 拡張する (5) 辞書を引く (8) 直接訂正する (10) 理解確認に対して応答する (11) NNSの理解を待つ (12) 話題を変える (13) 不理解を許容する (調整の放棄) の9種類であった。

これらのうち、(2) 反復する (3) 反復・拡張する (4) 拡張する (8) 直接訂正する (10) 理解確認に対して応答する (11) NNSの理解を待つストラテジーは、NSによってあらかじめ話された発話の中に不理解上の問題が含まれていることが前提となっているストラテジーである。

例6：事後調整・NNSの何らかの行動が引き金となって行われた調整「反復する」ストラテジー (NS7×FB7)

NS7：文学部わかる↑ 文学部

FB7： 文学  
{眉をひそめ、首を振る}

上の例ではNS7の「文学部わかる↑」という質問に対しFB7は理解できなかったため、首を振って不理解を表明している。これに対しNS5は「文学部」と自らの発話をもう1度繰り返すことによってFB7の理解を促している。ここでの「繰り返す」という調整行動は、繰り返す対象として、先に自分が発話した先行発話が存在することが前提となっている。つまり、あらかじめ自分が発話したものがなければ、それを繰り返すことはできないということになる。他の調整ストラテジーにおいても同様のことが言えよう。このようなストラテジーの性質を考えると、これらの調整ストラテジーが事前調整で確認されなかったのは当然であると考えられる。

また、(5) 辞書を引く (8) 直接訂正するストラテジーについては、その特徴として、会話の話題を一時的に中止して調整を行わなければならないという点が挙げられる。つまり、辞書を引いたり訂正するためには、それまで続けてきた話題を一度停止さ

せ、その調整行動に集中する必要があると考えられる。とするとこの種の戦略には、会話の流れを妨げる可能性が生じてくる。しかし、それにもかかわらず本研究においてこれらの戦略が選択、実施されていたのはなぜだろうか。

以下の例は、NS2とFB2との会話においてNS2が「辞書を引く」戦略を遂行する事例である。

例7：事後調整・NNSの何らかの行動が引き金となって行われた調整「辞書を引く」戦略（NS2×FB2）

NS2：神話一、マイス　　マイス、うーんと

{FB2の辞書に手を伸ばす}

FB2：　　×× ↑　　ちょっと調べてみる

NS2：いいですか

{辞書を引く} {FB2に調べた部分を見せる}

FB2：　　あ、myth ↑、あー

上の例では、NS2の専攻分野である「神話」がFB2の不理解問題となっている部分である。ここでNS2は、FB2が机の上に出していた電子辞書を使用し、和英辞典から「神話」を検索し、出てきた英訳をFB2に見せることにより理解を促進しようとしている。

また以下の例は、NS3による「直接訂正する」戦略の事例である。

例8：事後調整・NNSの何らかの行動が引き金となって行われた調整「直接訂正する」戦略（NS3×FA3）

NS3：

FA3：いやいや、まー、工学部一、だから一、まー、にぶん ↑ 作られるんでしょ ↑ 仕事、自分、自分で

NS3：　　あ、こ、工学部じゃなくて、ほう  
法律

FA3：あの作られるんですでしょ ↑ あの一工学部だから　　ほ  
法律

NS3：　　憲法とか　　法律

FA3：あーわかりました、なんか、法律　　low、low

このNS3とFA3との会話では、最初に自己紹介をしたときにNS3は「「法学部」で「法律」を専攻している」と話している。しかしFA3は、「「法学部」とか「法律」ということは普段あまり使わないからすぐに思い出せない、「工学部」は友だちがいるからよくわかる」ことが要因となり、「法学部」を「工学部」と勘違いして会話を進めてきていた。しかし、その後のFA3の「自分で作られるんでしょ」という発言が引き金となり、NS3は「工学部と勘違いしている」と気づくことになる。そして「学部はちゃんとわかってもらわなきゃだめだろ」と判断し、直接訂正を行ったという。

このように本研究では、NSの専攻分野や所属学部に関する語について問題が生じた際にこのストラテジーが適用されていた。これらは、NS自身に関わる語であることから、NSが正確にNNSに理解してもらわなければならない情報であったと考えられる。このことから、生じた不理解問題がNSにとって解決する必要性の高いものであったため、会話の流れよりも調整が優先されたと推察することができる。また (10) 理解確認に対して応答するストラテジーについても、この種のストラテジーはNNSにはっきりと調整を求められたことに対しNSが調整を行うものであるため、これもまたNSが調整を行う必要性が高く、調整が優先されるタイプのストラテジーであると考えられる。

一方、これらのストラテジーに対し、(12) 話題を変える (13) 不理解を許容するストラテジーは、他のストラテジーとは異なり、不理解問題を直接解決するタイプのものではない。(1) から (11) のストラテジーが不理解の調整を優先するストラテジーであるとするならば、(12) (13) は会話の進行を優先するストラテジーであると考えられることができる。

以下ではそれぞれの事例を紹介する。

まず (12) 話題を変えるストラテジーは、話題を変えることによって会話を進めるストラテジーである。このような会話の調整における話題の扱いについては、志村 (1989)、Larsen-Freeman and Long (1991) においても指摘されている。

例9：事後調整・NNSの何らかの行動が引き金となって行われた調整「話題を変える」ストラテジー (NS6×FB6)

NS6：文学部なんですけど  
あの一、なんか、本、本についてこう、本とかか、読んだり、

FB6：文学 うんうん

NS6：書いたりみたいなの↑  
ところなんですけど、そこで、あの一、日本の一文化についての、勉強

FB6：uhu ↑

NS6： するところにいるんですけど、今、え、留学生の方って一、なに、学部かあるんですか ↑

FB6： { 下を向 }

上の例はNS6が「文学部」について説明している部分であるが、FB6はこの部分を全く理解できず説明の後半に下を向いている。これを留意したNS6はFB6の不理解に気が付いたが、あえてここでの不理解問題を解決しようとはせず、新たな質問をすることによって話題を変更し、会話を進めている。

また、(13) 不理解を許容する戦略もまた、NSがNNSの不適切な発話から不理解問題に気づくにもかかわらず、あえて調整は行わずにそのまま会話をすすめていくものである。

例10：事後調整・NNSの何らかの行動が引き金となって行われた調整「不理解を許容する」戦略（NS5×FB5）

NS5： いつ日本に来たの ↑ 4月 ↑ うんうんうん  
ついたち ↑

FB5： うーん、4月 ↑ 4月はApril One 4月一、つ  
いたち ↑

NS5： に来たばかり ↑ うんうんうん、に来て

FB5： うーん、April One ↑

上の例でNS5は「（日本に）来たばかり ↑」とFB5に質問しているが、FB5からの「うーん、April One ↑」という返答から自分の質問を理解できていないことに気づく。しかしそれを調整することはあえてせず、FB5の返答に合わせてそのまま会話を進めている。つまり、ここでNS5は不理解問題の調整よりも会話の進行を優先したと推測される。

以上がNNSの何らかの行動が引き金となって実施された調整戦略である。先にも述べた通り、この種の調整戦略では、NSは自分の発話に対するNNSの反応を見て理解できていないと解釈し、調整を実施しているのであるが、この解釈が全て適切であったかと言えば、必ずしもそうではない。以下はNS6による「言い換える」戦略を適用して調整を行っている事例の1つである。

例11：事後調整・NNSからの何らかの行動が引き金となって行われた調整「言い換え

る」ストラテジー (NS6×FA6)

NS6: えと、文学部一です 本、本とか、そういう国語についての学部です

FA6: 文学部

この例でNS6はFA6の「文学部」という発話を「文学部」の意味がわからなかったための聞き返しであると解釈し、言い換えを行っている。しかし実際FA6は「文学部」の意味は知っており、単にあいづちをうただけであった。FUIにおいてもFA6は「文学部はわかりますよ」と、知っていて当然だという認識をしており、ここでの調整についてはやや否定的な感情を持ったようである。このようにこのタイプの調整は、NNSには過剰なフォリナー・トークとして否定的に評価される可能性もあるだろう(坂本他1989)。なお、NNSにとって問題ではない部分を問題として解釈し、不適切な調整を行っている事例はここでは33件確認されており、決して少ないとは言えない。

## 6.2 NSが自発的にNNSの不理解を留意して調整した場合

事後調整のもう1つのタイプとして、NSが自発的にNNSの不理解を留意して調整した場合が挙げられる。つまりこれは、NSが一度発話を行った後で、自ら不理解問題が生じたと判断し、調整を行う場合であるが、この種の調整事例は本研究では22件確認された。

表8: 事後調整・NSが自発的にNNSの不理解を留意して行った調整ストラテジー

	調整ストラテジー	割合
(1)	言い換える	17 (77.3%)
(2)	反復・拡張する	3 (13.6%)
(3)	拡張する	1 (4.5%)
(4)	説明を加える	1 (4.5%)
	合計	22 (100.0%)

ここでも(1) 言い換えのストラテジーの使用が大半を占めている。また、前項同様、NSが不理解問題であると判断した部分がNNSにとっては実際は問題とはなっていない事例も見られた。

例12: 事後調整・NSが自発的にNNSの不理解を留意して行った調整「言い換える」ストラテジー (NS3FA3)

NS3: おれ、自分が、実家、親が住んでるとこ は、安いよ、きっと(笑)

FA3: うん

上の例は、NS3とFA3との会話であるが、ここでNS3ははじめに選んだことば（「実家」）を発話した直後に、より易しい表現（「親が住んでるところ」）にパラフレーズをしている。しかしFA3にとっては「実家」はすでに理解できていることばであり、ここでの調整はFA3には不必要なものであった。

ここでは22件中16件がこのようなNNSにとっては必要のなかった調整が実施されていた。これもまたNNSによっては否定的に評価されたり、さらには会話の流れに支障を来す可能性もあり得るだろう。

## 7. まとめ

本研究では、NSがNNSの会話不理解に対して行う調整行動を、NSが発話前に実施されるか、発話後に実施されるかという観点からそれぞれ事前調整と事後調整とに分類し、その調整ストラテジーについて考察を行った。調査対象の人数や調査方法の限界から本研究ではNSの調整を全て把握するまでには至っておらず、ここでの結果をそのまま一般化することは早計である。しかし、これまでのフォリーナー・トーク研究に新しい視点を取り入れることにより様々な発見が得られ、フォリーナー・トークの新たな特徴を提案することができたのではないだろうか。

本研究の結果、NSが実施した調整は事前調整よりもNNSの反応をもとに行う事後調整の方が多く確認された。また事前調整が行われる際には音声面に関するストラテジーが多用されており、音声面に関する問題はあらかじめNS自身が留意する傾向にあると考えることができる。逆に言えば音声面の問題は、事後調整においては留意されにくいということになり、実際にNNSが音声面が要因となっている問題を抱えた場合、それはNSには調整されない可能性がある。

事後調整においては事前調整よりも多様なストラテジーが用いられており、中には不理解問題の解決よりも会話の進行を優先するストラテジーの使用も確認された。一方では、NNSにとっては不適切である調整が実施された事例も観察された。このようなNSとNNSとの認識のズレによって行われるNSの調整ストラテジーは、NNSに否定的に評価され、コミュニケーション問題の発端となることも予想される。さらに本研究では確認できなかったが、このような認識のズレは事前調整においても起こりうる問題であろう。そこで今後はこのような認識のズレについて詳しく考察を行い、コミュニケーション問題の要因を解明していくことが必要であると考えられる。また、NNSの日本語能力やエスニ



シティーなど属性によるNSの調整の特徴についても本研究では結果を見出すことができなかったため、今後の課題としたい。

しかしながら、NSがNNSとのコミュニケーションをはかるために様々な戦略を駆使して会話を管理、維持しており、そこでは必ずしもNNSがNSの発話を完全に正しく聞き取ることが期待されているわけではないという調査結果は、今後の日本語教育現場においても見逃すことはできないだろう。会話マネジメント能力の必要性についてはこれまでも指摘されてはいるが、実際の教育現場では依然として日本語習得のみを目標とした会話練習が主流になっているように思われる。しかし、NNSが実際にNSと「日本語で伝えたいことを互いに理解し合う」という目的の会話場面に直面した場合、本調査で明らかになったような調整を目的の当たりをすることを考えると、やはりNSがどのような特徴をもって会話を進めていくのかということは知っておく必要があるように思われる。そしてNNS自身もよりバリエーションのある戦略を使用し、会話をマネジメントする能力を身につけることは、円滑なコミュニケーションを営む手助けとなるであろう。

## 【参考文献】

- ・和泉元 千春 (1997) 『接触場面における発話調整の分析—中級学習者との会話を資料として—』修士学位論文 大阪外国語大学社会研究科
- ・大平 未央子 (1998) 「接触場面における日本語母語話者の言い直し」『多文化社会と留学生交流』3号 67-85頁
- ・尾崎 明人 (1992) 「聞き返しの戦略と日本語教育」『日本語研究と日本語教育』254-263頁 名古屋大学出版会
- ・御館 久里恵 (1998) 「日本語母語話者の接触場面におけるフォリナー・トークの諸相—非言語行動を含めた談話過程の観察から—」『日本学報』17号 111-123頁 大阪大学文学部
- ・坂本 正・小塚 操・架谷 真知子・児崎 秋江・稲葉 みどり・原田 知恵子 (1989) 「「日本語のフォリナー・トーク」に対する日本語学習者の反応」『日本語教育』69号 121-146頁 日本語教育学会
- ・志村 明彦 (1989) 「日本語のForeigner Talkと日本語教育」『日本語教育』68号 204-215頁 日本語教育学会
- ・スクーターデス、A. (1981) 「日本語におけるフォリナー トーク」『日本語教育』45号 53-61頁 日本語教育学会

- ・ 瀬藤 英美子 (1994) 『日本人のフォリナー・トークとその意識に関する一考察』大阪大学大学院修士論文
- ・ 田中 望・姉齒 浩美・河東 郁子 (1986) 「外国人の日本語行動一聴き取りのコミュニケーション・ストラテジー」『言語生活』418号 62-71頁 筑摩書房
- ・ ネウストブニー、J.V. (1994) 「日本研究の方法論一データ収集の段階」『待兼山論叢』28号 1-24頁 大阪大学
- ・ ネウストブニー、J.V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- ・ ファン、S.K. (1998) 「接触場面と言語管理」特別研究「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」会議要録
- ・ ファン、S.K. (2002) 「対象者の内省を調査する：フォローアップ・インタビュー」J.V. ネウストブニー・宮崎里司共編『言語研究の方法』くろしお出版 87-95頁
- ・ 宮崎 里司 (1999) 「第二言語習得とコミュニケーション調整モデル」『日本語研究と日本語教育』368-380頁 明治書院
- ・ Ellis, R. (1985) *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- ・ Ferguson, C.A. (1971) Absence of copula and notion of simplicity: A study of normal speech babytalk, foreigner talk, and pidgins. In Hymes, D.(ed.)*The Pidginization and creolization of lanugage*. pp.141-150. London: Cambridge University Press.
- ・ Gass, S. and E. Varonis (1985) Task variation and non-native/non-native negotiation of meaning. In S. Gass and C. Madden(eds.).*Input in Second Language Acquisition*. pp.149-161. Rowely, Mass.: Newbury House.
- ・ Larsen-Freeman, D. and Long, M. (1991) *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. New York: Longman.
- ・ Miyazaki, S. (1997) Communicative Adjustment between Native Speakers and Non-native Speakers of Japanese. Ph.D.thesis: Monash University, Melbourne.
- ・ Ozaki, A. (1985) Requests for clarification: a study of correction strategies. *Working Papers of the Japanese Studies Centre 2*. Japanese Studies Centre(Melbourne), No.3.

#### 【文字化資料凡例】

- ↑ 上昇イントネーション
- 、 短いポーズ
- ー 長音

(笑) 笑い

{ } 非言語行動

× 不明箇所

斜体 プロミネンス

(下線) 日本語母語話者による調整ストラテジー

K C I

## 要 旨

本研究では、日本語母語話者と日本語非母語話者の接触場面において日本語非母語話者が抱える会話理解上の問題を取り上げ、この問題に対し日本語母語話者がどのような調整を行っているのかについて考察を行った。特に従来の研究ではあまり目が向けられていない、日本語母語話者の発話前、発話後という点に焦点を当て、日本語母語話者が発話前に計画して実施した調整を事前調整、発話後に調整を行った場合を事後調整とし、それぞれどのような調整の特徴を持っているのかについて分析を行った。さらに、調整を単なる言語の修正という捉え方ではなく、会話の進行という広い観点から考察を行うことにより、より体系的に日本語母語話者の調整行動について明らかにすることを試みた。

その結果、日本語母語話者は、自分の発話に対する日本語非母語話者の反応をもとに調整を行う傾向が高いことが明らかになった。

調整全体を通して見ると、言い換えのストラテジーが最も多く用いられており、日本語母語話者にとって選択されやすいストラテジーであることがわかった。

また、事前調整においては、音声面に関するストラテジーが選択される傾向にあり、多用されていた。

事後調整では、事前調整よりも多様なストラテジーが用いられており、中には話題を変えたり、不理解問題をそのままにして会話を進めるなど、不理解問題を解決することよりも会話の進行を優先するストラテジーが選択された事例も確認された。

さらに事後調整においては、日本語母語話者が日本語非母語話者の反応から不理解問題を抱えていると判断したものが実際は問題ではなかった事例も確認され、そこで行われる調整が時には日本語非母語話者にとって適切ではない場合もあった。そしてこの種の調整は日本語非母語話者に否定的に評価される場合もあり、コミュニケーション問題の発端となる恐れもある。そのため、この認識のズレについては今後さらなる考察が必要とされるだろう。

以上のように、更なる考察が必要とされるものの、本研究において日本語で伝えたいことを互いに理解し合うことを目的とする会話場面で、理解し合うという目的を成し遂げるため、日本語母語話者が様々なストラテジーが使用していたことが明らかとなった。このことから、円滑なコミュニケーションを営むための手段として、日本語非母語話者によりバリエーションのあるストラテジーを提示し、会話をマネジメントする能力の向上を図ることも今後の教育現場では重要であると考えられる。

キーワード：接触場面、日本語母語話者、会話不理解、フォリナー・トーク、  
会話調整、コミュニケーション・ストラテジー

투 고 : 2006. 8. 31
1차 심사 : 2006. 9. 9
2차 심사 : 2006. 9. 30

住 所 : (320-931) 충청남도 논산시 상월면 대명리 14-9 금강대학교  
電 話 : 041-731-3457  
e-mail : kiai\_de\_ikeru@hotmail.com

K C I